

Title	初期ニヤーヤ学派の解脱論
Author(s)	友岡, 雅弥
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 18 p49-p.67
Issue Date	1985-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12186
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

初期ニヤーヤ学派の解脱論

友 岡 雅 弥

(一)

ニヤーヤ学派 (Nyāyika) は、インドのいわゆる六派哲学派のうちの一つの学派であり、その名は、その学派の方法論に由来する。その方法論 — nyaya は、この学派の綱要書である Nyāya-Sūtra (以下 NS.) に対して Vātsyāyana が施した註釈 Nyāya-Bhāṣya (以下 NBh.) による「諸認識手段による対象の考察 (pramāṇair arthaparīkṣanam)」と定義される。⁽¹⁾ この定義は恐らく Kauṭilya の Artha-Sāstra の中で Anvikṣiki に対して与えられた定義「道理による学問的探求 (hetubhir anvikṣamāna)」⁽²⁾ を用いたもので、Vātsyāyana はその方法論からニヤーヤの体系を Anvikṣiki とも呼ぶ。⁽³⁾

さて、NS.I.I.1 は、NS. で扱われるトピックを以下のように列挙 (uddesa) する。

認識手段・認識対象・疑い・動機・实例・定説・論証支分・検討・確定・論議・論諍・論詰・疑似理由・詭弁・誤った論難・敗北の立場の真理の認識から至福の達成がある。

pramaṇa-prameya-samśaya-prayojana-dṛṣṭānta-siddhānta-avayava-tarka-nirṇaya-vāda-jalpa-vitanda
 hetvābhāsa-cchala-jāti-nigrahasānanāṁ tattvajñānaṁ niḥsreyasādhigamaḥ.

さてここに列挙されたトピックのうち特に Vāda に関係する疑い以下のトピックは、Vatsyayana の言ふ nyaya の方法においてそれぞれの位置を占める。⁽⁴⁾即ち nyaya の方法は疑いをもって始まる一疑われた対象に対しておこな⁽⁵⁾。疑われた対象とは「真理の不確定」⁽⁶⁾な対象である。そのために人が活動するところのものが動機⁽⁷⁾であるが、nyaya もそれを依りどころとしておこる。⁽⁸⁾さて動機についての NBh. をここで述べておく必要がある。

人は何らかの対象が得られるべきであるか、棄捨されるべきであるかを決定する時、その対象を得たり棄捨したりするための手段を實行することになるが、そのような対象が動機として知られるべきである。⁽⁹⁾

yam artham aptavyam hatavyam va vyavasāya tadapīhanopāyam anuṣṭiati, prayojanam tadveditavyam.

次に、疑いに始まった nyaya は、その実例との一致によって自説が証明されるから実例にもとづいている。⁽¹⁰⁾それは「すぐれた nyaya」⁽¹¹⁾とよばれる五段階の支分を持った論証式の形で行われる論議、論争、論詰という具体的な形でもあらわれる。またそれは、吟味を補助とし、吟味は真理の認識に役立つ。⁽¹²⁾そして最終的にこの nyaya の方法の最後に位置づけられるのは、「認識手段の結果としての真理の認識 (tattvajñāna)」⁽¹³⁾であるところの確定である。⁽¹⁴⁾

以上 NS.I.I およびそれに対する NBh. の記述に従って nyaya の方法を見てきたが、それらを要約すると、

nyāya の方法とは、真理 (tattva) の不確定な一疑われている対象に対して、諸認識手段による考察を行い、真理の認識 (tattvajñāna) を得る体系的方法であると言えよう。

では、その真理の認識を求めて nyāya の方法が展開される対象とは何であろうか。そのことを NS. によって考えてみよう。そうすることによってニヤーヤ学派の学派としての努力が何をめぐってなされたかが知られるであろう。

先に nyāya とは「認識手段による対象の考察」であると述べたが、その認識手段 (pramāṇa) の対象、即ち認識対象 (prameya) とは何であろうか。このことについて NS. I. 1. 9 は次のように述べる。

認識対象は、これ（認識手段が、知覚、推理、類推、証言の四種であること）に対して、アートマン、身体、認識能力、対象、意識、思考能力、活動、欠陥、転生、結果、苦、解脱である。

ātma-śarīra-īndriya-artha-buddhi-manah-pravṛtti-dosa-preyabhāva-phala-duḥkha-apavargas tu prameya.

ここに示された十二種の認識対象の区分は明らかに存在論的な区分ではない。我々はニヤーヤ学派の存在論的な区分として、ヴァイシエーシカ学派と同じく、実体、属性、運動、普遍、特殊、内属という区分を知っている。この区分に比べると、NS. I. 1. 9 の区分は存在論的なものとしては不完全に見える。事実、同様な批判は、ジャイナスの Vādiśva からなされてくる。⁽¹⁵⁾

では、この NS. I. 1. 9 に見られる区分は何のためになされたのであろうか。このことについては Vātsyāyana 自身が次のように述べる。⁽¹⁶⁾

他の、実体、属性、運動、普遍、特殊、内属という認識対象もあるが、区別すれば限らない。それに対し、この (NS. I. 1. 9 の認識対象についての) 真理の認識によって解脱があり、誤った認識によって輪廻がある。故に、これ (NS. I. 1. 9 の認識対象) が特に列挙されたのである。

asty anyad api dravya-guṇa-karma-sāmānya-viśeṣa-samavāyāḥ prameyam tad-bhedena cāparisaṅkhyeyam. asya tu tattvajñānād apavarga mihyājñānāt samsāra ity ata etad upadīṣṭam viśeṣeṇeti.

ここで明らかにされたように NS. I. 1. 9 で列挙された認識対象のリストは解脱との関係で選ばれたトピックのリストなのである。「認識手段により対象を考察」し、結果として「真理の認識」を得る nyāya の方法は、解脱の問題と密接に関係していると思われるのである。それについての「真理の認識によって解脱があり、誤った認識によって輪廻がある」ところのアートマン等の認識対象に対して、「認識手段による考察」を行い、「結果としての真理の認識」を得る体系が、ニヤーヤ学派の哲学体系であると言えよう。

(二)

では、真理の認識と解脱の関係は、一体どのようなものであろうか。このことについて我々は、NS. を資料として以下に検討を加えよう。

NS. 第三篇、第四篇は、NS. I. 1. 9 で列挙 (uddesa) された十二の認識対象に対する考察 (parikṣā) の部分である。この認識対象に対する冒頭部はかなり大きな部分を占めるのが、アートマンが認識能力とも (III. I. 1-3) 身

体とも(III.1.4-5)意識とも(III.1.16-17)別であることの考察(及び証明)である。この「アートマンが身体等と別である」という概念は、ニヤーヤ学派の解脱論の一つの中心的概念であると考えられる。何故ならば、ニヤーヤ学派の輪廻の次第において最初の位置を占る「誤った認識」及びその反対概念の「真理の認識」⁽¹⁷⁾に関する考察を述べるNS.第四篇第二章の冒頭のストトラ(「欠陥の原因の真理の認識により自我意識が減する」)の中の自我意識は、「誤った認識」を意味すると思われるが、それはNBh.の記述に従えば、「アートマンでないものにアートマンを見ること」⁽¹⁸⁾であり、そして「アートマンでないもの」とは、NBh.によると「身体と認識能力と意識と思考と理性である」⁽¹⁹⁾とされるからである。身体等において、それらとアートマンとの区別が、NS.において詳しく考察されているのは、それらとアートマンとの区別を認めず、それらにアートマンを見る「誤った認識」が輪廻の次第の初項をなすからである。この身体等を対象とする自我意識(身体等にアートマンを見ること)は「輪廻の種子」⁽²⁰⁾であるとされる。

自我意識が輪廻の種子となる理由をNBh.は次のように述べる。⁽²¹⁾

実にこの自体等の集まりを私であると認識した人は、それを捨てることがアートマンを捨てることだと思ひ、捨てたくないという渴望におそわれて、何度も何度もそれを受ける、それを受けた人は死と共にあり、それから離れず、苦から究極的に解放されることはない。

ayan. khalu śarīrādya-ārtha-jātam aham asmi iti vyavastīyah tad-ucchedena ātma-ucchedaṁ manyamāno
' uccheda-irsnāpariplutah punah punas tad upadatte, tad-upadadano janma-maranāya yatate, tenāvi-
yogān nātyantam duḥkāḍ vimucyata iti.

ここでニヤーヤ学派の主張する輪廻の次第が明らかになる。それは身体等においてアートマンを見ると「誤った認識」により、身体等を捨てる解脱をいとい、身体等に対して渴望を起して輪廻するというプロセスをとるのである。

では、逆に身体等においての「真理の認識」とは何であろうか。身体等は一体どのようなものと思われるべきなのであろうか。ここで我々は、ニヤーヤ学派の解脱のプロセスに言及することになる。NS. IV. 1.5 において「生を得ることは苦のみである」と述べられている。この「生を得ること」は、NBh. の記述によると、まさに「身体と認識能力と理性」⁽²²⁾なのである。身体等は本来苦のみなのである。しかし、輪廻する人々は、そこにアートマンを見、そこに苦ではなく「楽（アートマンの特性のうちの一つ）を見（NS. IV. 1.5）」、「楽以外に至福はない」と考える。楽を得た時目的を実行した、なすべきことはなしたと思う。そして誤った構想（sankalpa）⁽²³⁾のために幸福とその手段という対象に愛着する（samrajate）⁽²⁴⁾のである。「構想」とは、ここでは「誤った認識」と同義であるが、それは記憶や夢のように現実の対象を有さない認識で、現実と矛盾した認識であるといってもよいであろう。⁽²⁵⁾その「構想に従って（欲望と嫌悪が）無知な人に生じる」⁽²⁶⁾。

ニヤーヤ学派の解脱論においては、以上のことから明らかなように輪廻の原因は「アートマンでない身体等にアートマンを見、楽を見てそれに渴望を（言いかえれば欲望—raga）をいだく」というスキームで示され得るのである。そして解脱の条件は「身体を苦と見る」ことであるといえよう。「身体等にアートマンを見る」ことの逆として、当然のことながら「苦と見る」ことは欲望を離れることにつながってゆく。NBh. はこのことについて次のように述べている。

(すべてが苦であると) サマーディする人は思惟し、思惟する人はいとう、いとう人は欲望を離れ、欲望を離れた人には解脱がある。⁽²⁷⁾

samāhito bhāvayati bhāvayannirvidyate nirvīṇāsya vairāgyam viraktasya apavarga itī.

すべてが苦につらぬかれていっていると見て、苦を断ち切ろうと思う人は、生存を苦とみなしていとう、いとう人は欲望を離れ、解脱する。⁽²⁸⁾

so'yaṁ sarvaṁ dukhena anuviddham itī paśyan dukhāṁ jhāsur janmani dukhadarśī nirvīṇo virajyate virakto vimucyate.

ニヤーヤの解脱論にとって解脱は「生存、身体等を苦と見る(無論、それらをアートマンと見る「誤った認識」とは正反対である) ことによって、離欲し、解脱する」というプロセスで達成されるのである。ニヤーヤの解脱論にとって「苦と見る」あるいは、「苦と知る」ことこそ、「輪廻の種子」⁽²⁹⁾である「誤った認識」に対抗するものであって解脱の重要な要因と考えられるのである。NBh. は次のように言う。

苦は正しく知られると、捨てられる。毒の入った食物のようにもはや取りはしめないからである。

parijātān ca dukhān prahīṇān bhāvayān anupādānāt savīśānavatī.

(三)

さて、ニヤーヤ学派の解脱論に関して、我々は、NBh.に述べられる arthapada と名付けられた区分を検討する必要があるだろう。それは NBh.中に三か所認められるが、最初のものは NS.I.1.1 に対する註釈部分にあらわれる。前後を訳してみよう。⁽³⁰⁾

実際は、アートマンを始めとする認識対象の真理の認識から至福の達成がある。そのことは後のスートラ (I.1.2) によって述べられるであろう。達成されるべき、「棄捨されるべきもの」、「その原因」、「完全な棄捨」、「その方法」という四つの「根本真理 (arthapada)」を正しく理解すると、至福が得られる。⁽³¹⁾

ātmadeh khalu prameyasya tattvajñānān niḥśreyasa-adhigamaḥ. tac caitatd uttarasūreṇa anudyata iti. heyam, tasya nirvartakaṃ, haṇam ātyantikam, tasyopāyo' dhigantavya iti etāni catvāryarthapadāni saṃyag-buddhvā niḥśreyasam adhigacchati.

この部分において「達成されるべき、棄捨されるべきもの等の四つの根本真理を正しく理解すると、至福が得られる」という文は、明かに「認識対象の真理の認識から至福の達成がある」という文と、Vatsyāyana によってその文と関係づけられた「後のスートラ (NS. I.1.2)」に述べられる解脱の次第、即ち、

苦・生存・活動・欠陥・誤った認識が、それぞれ後のものから滅すると、その直前のものが滅するので、解脱がある。⁽³²⁾

いると考えられるのである。

さて、Oberhammer によると、この「四種類の根本真理」の区分は、Patanjali のヨーガにそのオリジンを見つけていることができる⁽³⁵⁾という。

Yoga-Sūtra は次のように言ふ。

棄捨されるべきもの (heya) とは、未来の苦である (II. 16)。

棄捨されるべきものの原因 (heya-hetu) とは見るものと見られるものとの結合である (II. 17)。

棄捨 (hana) とは結合のないことであり、見るものの独存である (II. 25)。

棄捨の方法 (hana-upāya) とは動揺しない識別知である (II. 26)。

しかし、まとまった型の四区分は、我々の知る範囲では Yoga-Bhāṣya において初めてあらわれ、Yoga-Bhāṣya は以下のように言う⁽³⁶⁾。

医学書が、病氣、病氣の原因、治癒、薬に分科されるように、この (ヨーガの) 哲学書も四つに分科される。

輪廻、輪廻の原因、解脱、解脱のための方法である。このうち苦に満ちた輪廻は棄捨されるべきもの (heya) であり、プラダーナとプルシャの結合が棄捨されるべきものの原因 (heya-hetu) であり、結合を絶対的に滅することが棄捨 (hana) であり、正しい認識が棄捨の方法 (hana-upāya) である。

解脱道体系全体を四区分することは右のように、Yoga-Sūtra と同じようにも、Yoga-Bhāṣya の功績と思わ

れるので（無論、その背後には仏教の四諦説があるのであろうが）、NBh.の「四種類の根本真理」の区分のオリジンはYoga-Bhāṣyaに認められるのであろうが、ともかく「四種類の根本真理」の区分は、ヨーガの術語を使って、ニヤーヤの解脱道体系を整理し、世に宣言したものであるといえるだろう。Oberhammerによると、Patanjaliのヨーガは、その当時、解脱のモデル教説とされ、その用語に言及することが、自らの学派が真の解脱論を示すというVaiśyaṇaの主張を強めるために最適であると思われる⁽³⁷⁾。確かに、「四種類の根本真理」の区分にあらわれる術語は、おそらくヨーガのものであろうが、しかし四区分にわけること自体の起源をヨーガに求めることはできない。ニヤーヤ自身の伝統にそれがすでにあったことを示す四区分の例と、ニヤーヤ独自の教説にあてはまる術語を使った四区分の例がNBh.中に存在するのである。

さてNBh.中の三つの四区分のうち二つ目の四区分は、信頼すべき人(āpa)についてのNBh.中にある⁽³⁸⁾。諸法を直接に見た(sakṣātrita)人が信頼すべき人であって、その人による一般の人々へのアドヴァイスを述べる部分にそれは出てくるのである。それをまとめると次のようになる。

棄捨されるべきもの (hātayya)

棄捨の原因 (hāni-hetu)

達成されるべきもの (adhigantavya)

達成の原因 (adhigama-hetu)

それぞれの区分の具体的内容についてNBh.は述べないが、我々はここでむしろこの区分が信頼すべき人によっ

て述べられているということに留意すべきである。先に述べたようにその人々は、諸法を直接的に見た人であり、そして諸法をありのままに (yathābhūtartha) 他に知らしめようとする人である。⁽³⁹⁾ この「ありのまま (yathābhūta)」という語はニヤーヤの解脱論においては、重要な術語である。Vatsyayana は「有るものが有るとありのままに、倒錯なく把握された時、それが真理 (tattva) である」と述べ、また後に見るように、彼は第二番目の四区分を述べるところで、「このように四種に分類された認識対象を実修し、修習し、思惟する人には、正しい見解、ありのままの認識 (yathābhūta-bodha) である真理の認識が生じる」と述べているのである。⁽⁴¹⁾

ここで我々は四区分がニヤーヤの解脱論と密接に関係して、すでに一つの常識として（信頼する人々の言として述べられているから）、存在したということを知ることができるであろう。

ニヤーヤの解脱論を四区分で構造化したのは、Vatsyayana ではない。それは彼の時には、すでに四区分で構造化されていた（逆に、そのような四区分と密接な関係を持って発展したとも考えられる）のである。そして、その区分には、「達成されるべきもの」の区分が一項目として入っている。それは、N.S.I.I.1 の「真理の認識から至福の達成がある」という表現を受けたものであろう。従ってヨーガの四区分と用語まで一致する NBh. の第一区分はその位置 (NBh. の初めの部分にそれはあらわれる) 故に、すでにニヤーヤ学派に存在した固有の区分を、ヨーガ学派の用語を用いて、一般性を持たせて整理しなおしたものであると考えられるのである。

NBh. に見られる三番目の四区分は「誤った認識」と「真理の認識」を述べる N.S. の第四篇第二章に対するイントロダクションの部分にあらわれる。直前には、すでに本稿第二章で述べたように、アートマンではないものをアートマンであるとみることから始まる輪廻のプロセスと、その逆の、それら苦と見ることから始まる解脱のプロセ

すが述べられ、それらをまとめた形で四区分が次のように述べられる。⁽⁴²⁾

転生と結果と苦は、「知られるべきもの(jñeya)」と決定する。行為と欠陥は「棄つられるべきもの(praheya)」と(決定する)。解脱は「達成されるべきもの(adhigantavya)」であり、真理の認識は「その達成の方法(tasya adhigama-upāya)」である。

このように四種に分類された認識対象を実修し、修習し、思惟する人には、正しい見解、ありのままの認識である真理の認識が生じる。

preybhāva-phala-duḥkhāni ca jñeyāni vyavasthāpayati karma ca doṣaṁś ca prahēyaṁ. apavargō dhigantavyas tasyādhiḡamopāyas tattvajñānam. evaṁ cetasrībhīr vidhābhī prameyaṁ vibhaktam. āsevamanāsya abhyāsyaṭo bhāvayatai samyagdarśanaṁ yathābhūtabodhs tattvajñānam.

さて、この三番目の四区分は、ニヤーヤ学派の解脱論にそのままではまる。ニヤーヤ学派の解脱のプロセスの最初の項は、「苦を知ること」であった。それがこの区分においては、苦およびそれに満たされたものとしての転生と結果は「知られるべきもの」とされている。「苦を知ること」の次の項は、「欲望を離れること」であるが、この区分においては、欲望をその一部とする欠陥は、行為と共に「捨てられるべきもの」とされている。そして、解脱のプロセスの最終項は、「苦の滅であるところの解脱を達成すること」であるが、この区分においては、「解脱は達成されるべきもの」とされている。そして「その方法」は「真理の認識」である。

概念の完全な一致からして、この三番目の区分とニヤーヤの解脱論との関係は本質的なものであろう。ニヤーヤ

においては「四種類の根本真理」の区分が知られるが、それは前にも見たように、すでにニヤーヤの中に存在した解脱体系全体の四区分をヨーガ学派の用語を用いて一般的に述べたものにすぎないのである。決して解脱体系全体を四つに区分すること自体が、Vatsyayanaによつて始めてヨーガの体系からニヤーヤにもたらされたのではないのである。(恐らくそれは、仏教から直接導入されたものであろう。なぜなら、仏教には四諦の第一番目を「知られるべきもの」とし、二番目を「捨てられるべきもの」とする伝統があるからである。そして「知られるべきもの」と「捨てられるべきもの」はニヤーヤの解脱論にとつても中心となるべきものであるから、ニヤーヤと仏教との密接な関係が予想されるのである。⁽⁴⁴⁾このことについては今後の研究の課題として今はこれ以上は述べない)。

(四)

さて最後に NBh. 以後のニヤーヤ学者の「四種類の根本真理」の区分に対する見解を見ておきたい。NBh. に対する現存する最古の注釈書である Uddyotakara の Nyaya-Varttika (以下 NV.) には二箇所「四種類の根本真理」の区分があらわれる。⁽⁴⁵⁾以下にそれらを図示しよう。

I

棄捨されるべきもの (heya) .. 苦とその原因

棄捨 (hana) .. 真理の認識—認識手段

方法 (upaya) .. 哲学書

達成されるべきもの (adhigantavya) .. 解脱

II

棄捨されるべきもの (heya) … 苦

棄捨 (hana) … 真理の認識

方法 (upaya) … 哲学書

達成されるべきもの (adhigantavya) … 解脱

これらの四区分をNBh.のそれと対比すると大きな相違に気づく。まず「棄捨」と「達成されるべきもの」とがNV.では両立しているということである。恐らく、NBh.の第一の区分において四区分全体にかかる「達成すべき」を一項目として独立させた故にこのようなことがおこったのであろう。それは、第二、第三区分のような「達成すべきもの」を含んだ四区分が、ニヤーヤにはすでに存在したということの一つの証明となるであろうが、それを「棄捨」と併立させたことは明らかにNV.の誤りである。「棄捨」も「達成すべきもの」もすでに第三章でみたようにニヤーヤにおいては本来同じく「解脱」をあらわしているはずである。それを両立させ、しかも「棄捨」を「真理の認識」とみなすのは大いなる誤りである。またNBh.の四区分とのもう一つの相違——「棄捨されるべきもの(苦)の原因」の項目が独立していないということ——も、このように「棄捨」と「達成すべきもの」を両立させたという誤りから生じたものである。

以上のようなNV.の区分に対して、Bhāsarvajñaの区分は、「棄捨されるべきもの (heya)」、「その原因 (tasya nirvartaka)」、「完全な棄捨 (atyantika hana)」、「その手段 (tasya upaya)」と、NV.の四区分と同じ区分

である。しかも彼は同箇所の自註で、*Yoga-Sūtra* II. 17, 24, 25, 27 をあげて、NBh. の第一区分とサーンキヤ（ヨーガ）学派の区分が全く同じであることを示している。⁽⁴⁷⁾

以上のように NBh. 以後の「四種類の根本真理」の区分について検討してみると、まず NY. は字句にこだわるあまり（もしくは本質的な理解に欠けているのか）、NS.、NBh. に述べられたニヤーヤの解脱論から逸脱した見解をとってしまっている。また、Bhasarvajña はニヤーヤ学派の中でも Ekadesin と呼ばれる、サーンキヤ・ヨーガ学派に近い立場に立っていることにもよるものであろうか、ヨーガ学派の体系に還元しすぎた解釈をしている。あくまでもニヤーヤの解脱のプロセスは、苦を知り、離欲し、苦の滅であるところの解脱を、真理の認識（それは疑いに始まり確定に終る nyāya の方法によつて得られる）によつて達成するプロセスであり、それは、NBh. の三番目の区分によつて、最もふさわしい形を構造化されるといってよいだろう。

注

- (1) G. Jha (ed.), *Nyāya-Bhāṣya* (邦訳 NBh.), Poona Oriental Series, No. 58, Poona, 1939, p. 3, l. 165.
- (2) G. Oberhammer, Paksilasvāmī's Introduction to his Nyāya-bhāṣyam (邦訳 Pl.), *Asian Studies*, Vol. 2, No. 3, 1964, p. 309, fn. 19. cf. P. Hacker, *Ānvikṣiki*, WZKSQ, Vol. 2, 1958, p. 735.
- (3) cf. NBh. p. 3, l. 5.
- (4) Oberhammer (Pl. p. 317, l. 8f.) はそれぞれのトピックを nyāya の条件（疑い、動機、実例、論証支分、検討）と結果（定説、確定）と論争の手段（論議、論争、論詰、定説、疑似理由、詭弁、誤った論難、敗北の立場）に分ける。
- (5) NBh., p. 3, l. 9, saṁśayīte 'rthe (nyāyah pravartate)°
- (6) *Ibid.*, p. 39, l. 4, tattva-anavadhāraṇam saṁśayam iti.
- (7) NS. I. 1. 24, yam artham adhikṛtvā pravartate tat prayojanam.

- (8) NBh, p. 3, l. 16, tad-āśrayas ca nyāyah pravartate.
- (9) *Ibid.*, p. 40, l. ff. nyāya に導く疑いと動機の組み合わせは、後に見るように、nyāya の方法が解脱と密接に結びついてい
るのだから見て、仏教の発心を連想させる。また動機に対する NBh. 中にある「得られるべき」「棄捨されるべき」と言う
言葉は後にも見るように解脱との関係で特に注意すべきであるが、ここではこれ以上は述べない。
- (10) cf. NBh, p. 5, l. 1f., tad-āśraya ca nyāyapravrtih.
- (11) *Ibid.*, p. 5, l. 12, so' yam paramo nyāya ih.
- (12) *Ibid.*, p. 5, l. 12f., etena vāda-jalpa-viandāh pravartante.
- (13) *Ibid.*, p. 5, l. 15, pramāṇān amugrāhakas tattvajñānasya kalpatē. cf. *Ibid.*, p. 54, l. 5-6.
- (14) *Ibid.*, p. 6, l. 8, nirnyas tattvajñānam pramāṇam phalaṁ.
- (15) *Syādvāda-Ratnākāra*, verse. 8.
- (16) NBh, p. 23, l. 7, f.
- (17) cf. NBh, p. 9, l. 6f. この箇所において、「誤った認識」に始まり、苦をもつて終る諸のダルマを途切れぬ循環であるところの
の輪廻の有様が述べられる。逆の、解脱に向かう次第につづけば、NS. l. 1. 2°
- (18) NBh, p. 288, l. 1f., anāmanya ānagrahah—aham asmi ih moho 'hankāra ih.
- (19) *Ibid.*, p. 288, l. 4, śarira-indriya-mano-vedanā-buddhayah.
- (20) *Ibid.*, p. 287, l. 7, p. 288, l. 5.
- (21) *Ibid.*, p. 288, l. 6f.
- (22) *Ibid.*, p. 275, l. 2, jāna-jāyata ih śarira-indriya-buddhayaḥ.
- (23) sankapa とどう概念を中心にした、特にストトラ第四篇に対する NBh. に述べられるニヤーヤ学派の実践的解脱論について
は、Oberhammer 博士の次の一連の労作がある。特にそこに述べられるニヤーヤの具体的なヨーガ行は、本稿を書くにあた
り甚だ有益であった。

Transszendenzforschung, Vollzugshorizont des Heils, *Transszendenzforschung, Das Problem in indischer und
christlicher Tradition*, Wien, 1978, p. 7-12. Die transszendentale Struktur der Weltverfallenheit bei Pakṣiśāsvāmin,
Indogica Taurinensia, Vol. 10, 1982, p. 169-178. *Ephiphanie des Heilz, Zur Heilsgewahrt in indischer und*

- christlicher Religion, Wien, 1982. Wahrheit und Transzendenz, Wien, 1984.*
- (24) *NBh.*, p. 276, l. 12f., na. sukhād anyanīśreyaśam asu. sukhe prāpte carta-arthah. kṛta-karaṇīyo bhavati. mīthyaśaṅkalpāt sukhe tat-sādhanesu ca viśayeṣu samrajyate.
- (25) cf. *NS. IV. 2. 34.* smṛti-śaṅkalpavāt ca svapna-viśaya-abhīnānah.
- (26) *NBh.*, p. 243, l. 18f., mudhasya tu yathā śaṅkalpam utpattiḥ. 1) のインヤージュに因つて *NBh.* の「中論」一三三・一 (śaṅkalpa-prabhavo rāgo dveṣo mohāś ca kathyate, śubhasubha-viparīyāsān saṁbhavanī pratyā hi) のの類例を并列せざるべからざる。2) の「中論」の因縁の問題、pramāṇa 2) śaṅkalpa の問題等と同一せば、また改めて論じた²⁾。
- (27) *NBh.*, p. 23, l. 5f..
- (28) *Ibid.*, p. 32, l. 10f..
- (29) *Ibid.*, p. 288, l. 10.
- (30) *Ibid.*, p. 2, l. 16f..
- (31) 従来その「」の「根本真理」の四区分に関して、「達成されるべきものの」を独立の項目として立つ「棄捨されるべきもの」とこの原因」をまたもつて一項目と解釈するのが通例であった。恐らへんの解釈は Uddyotakara から始まると思われながら、それは第四章で述べるものに譲りて置かれる。
- (32) *NS.*, l. 1. 2.
- (33) 注 (31) 参照
- (34) *NBh.*, p. 9, l. 8f..
- (35) Oberhammer, *Pl.*, p. 312, l. 22f..
- (36) D. Shastri (ed.), *Yoga-Bhāṣya*, CSS, 1935, p. 185f..
- (37) Oberhammer, *Pl.*, p. 315, l. 15f.
- (38) cf. *NBh.*, p. 124, l. 3f., āpāñi khalu śākṣātkṛtadharmāṇah — idam hatavyam idam hanīetur idam asya-adhigantavyam idam asya-adhigamaheetur it.
- (39) *Ibid.*, p. 124, l. 2f., śākṣātkṛtadharmatā bhūtadavā yothābhūtārtha-cikhyāpaviseṭi.

- (40) *Ibid.*, p. 2, l. 1f., sat sad iti gṛhyamānaṃ yathabhūtam aviparītam tattvam bhavati.
- (41) *Ibid.*, p. 289, l. 3f., evaṃ catasṛbhir vidhābhīḥ prameyaṃ vibhaktam āsevamaṇasya abhyāsato bhāvayatāḥ saṃyagdarśanam yathabhūtabodhas tattvajñānam.
- (42) *NBh.*, p. 289, 11f..
- (43) *cf.* E. Waldschmidt, *Das Catuṣparīkṣitītra*, Teil II, Berlin, 1957, p. 146.
- (44) それぞれの最後の区分(道諦、方法)が仏教とニヤーヤの相違を示しているのであろう。仏教においてそれは八正道の実践であり、ニヤーヤにおいてはそれは「疑い」に始まる *nyāya* の方法を通じて得られる「真理の認識」である。「中論」との関係も含めての仏教とニヤーヤとの関係については改めて論じてみたい。
- (45) *Mithla* 版 (A. Thakur ed., *Mithla*, 1967) p. 8, l. 1f., p. 14, l. 1f..
- (46) *Bhasarvajña, Nyāya-Sūtra*, Varānsī, 1968, p. 436. また彼は同箇所に対する *Nyāya-Bhūṣana* (p. 442, l. 10f.) で仏教の四諦とニヤーヤの「四種類の根本真理」を同一のものとして語る。
- (47) *Loc. cit.*